

東北海区沿岸水温予報(2003年)

海域	経過 (9~11月)	現況 (11月下旬~12月上旬)	見通し (12~2月)	見通しの背景	特異現象 (漁海況)
三陸北部 (青森県太平洋沿岸; 青森水試発表)	定地水温 7~8月:かなり低め 9~10月:やや低め 8月の定緯観測結果 0m: 平年並み 50m: かなり低め 100m: やや低め 津軽暖流の張り出しはや狭め 8月の水塊深度は、平年並み	定地水温 11月: 平年並みからやや高め 11月の定緯観測結果 0, 50, 100m: かなり高め 津軽暖流の張り出しは平年並み 11月の水塊深度は、平年並み	津軽暖流域の水温はかなり高めから平年並みとなる。 津軽暖流の東方への張り出しは平年並み	12月の対馬暖流の流幅は平年並みで推移した。 勢力としては平年並みからやや弱め。	エチゼンクラゲの大量来遊が11月末現在でも継続している。
三陸中部 (岩手県沿岸; 岩手水七発表)	9月 表面: 沿岸で平年より1~3 程度低めのほかは平年並み 100m: 沖合で平年より2~6 程度低め 10月 表面: 概ね平年並み 100m: 平年より1~3 程度低め 11月 表面: 概ね平年並み 100m: 平年並み~2 程度低め	表面 県北部で11~13 台、県中部で12~13 台、県南部で13~14 台、平年と比べると、県全域で平年並み、100m 県北部で10~12 台、県中部で10~13 台、県南部で11~13 台、平年と比べると、県北部の距岸30海里付近で平年より2 程度低めの他は平年並み~3 程度高め。	表面は平年並みで推移する。 100m は平年並み~やや低めで推移する。	三陸中暖水塊は今後も持続し、ゆっくりと北東方向へ移動すると考えられる。 津軽暖流の勢力が現況のまま推移し、親潮第1分枝の本県沿岸への流入が阻害され続けると考えられる。	9~11月に本県沿岸にエチゼンクラゲが大量に来遊し、定置網、底曳網等の漁業に被害をもたらした。 秋サケの定置網水獲量が11月下旬の段階で対前年比125%となった。
三陸南部 (宮城県沿岸; 宮城水七発表)	9~10月...表面は平年より1~2 低め、100m深は2~4 低め。 11月...表面は平年並、100m深は142'10'~50'E周辺海域で平年より2~4 低め。他の海域はほぼ平年並	表面は12~14 台でほぼ平年並、100m深は北宮毎域で14 台、南部毎域で9 台となり、南部毎域は平年よりやや低め~極めて低め、北宮毎域は平年並~平年よりやや高め。	表面は平年並で推移、100m深は、沖中南部毎域を中心に平年よりやや低め~低めで推移。	三陸中暖水塊は今後も持続し、徐々に北東に移動すると考えられる。これに伴い、親潮第2分枝に連なる冷水が宮城県毎域に断続的に引き込まれと考えられる。	エチゼンクラゲが牡鹿半島より沖側の定置網で、10月初め頃から入網し始めた。その後刺網、底曳網などにも入網し、11月に入り相当数が来遊して漁業被害あり。 ・10月頃からスルメイカ水揚げ多い。(10月: 昨年比24%, 11月: 昨年比3%) ・サンマ豊漁で価格暴落 ・10月頃から12cm前後のスケウダラ0歳魚が沖底で継続的に漁獲された。
常磐北部 (福島県沿岸; 福島水試発表)	9月: 表面は季節昇温が鈍い、平年並み~やや高めだが、下層には親潮系冷水が分布し低め~極めて低めとなった。黒潮系暖水は、前月に引き続き県南部沖合で弱く波及がみられるのみ。 10月: 親潮系冷水が断続的に南下し、低め~極めて低めの状態が継続した。黒潮系暖水の波及はみられない。 11月: 前月みられた極めて低めの海域は縮小したものの、依然として低めで推移した。特徴としては、親潮系冷水が県中北部沖合から波及し、本県沿岸に冷水域が形成されたことである。	(12月上旬) 全域で低め~極めて低めとなった。親潮系冷水は距岸75海里付近の沖合にみられ(T100で4 台)、沖合からの冷水波及の傾向は前月から引き続きしている。	期間を通じて「やや低め~低め」で経過する。特に、県南部沖合では「極めて低め」の海域もみられる。	黒潮系暖水の勢力が弱まり、親潮の南下が強まる時期である。黒潮流は依然として南偏しており、期間中に北上が強まるとは考えにくい。以上から現況の低め基調が解消する見込みは少ない。 T100主成分スコアの自己回帰モデルによる予測でも、県沿岸でやや低め、県中北部沖合および南部沖合で低めとなった。	・平年では8月中旬以降に始まり、9~10月に本格化するカタクチイワシラス漁だが、今年は9月中旬に初漁となったものの持続せず、10月中旬に漁が細くなりほぼ終漁状態となっている。 10月中旬以降、エチゼンクラゲが本県沿岸にも来遊し、漁業被害となるような規模ではないが、底曳網、さし網、定置網等に入網した。 ・11月に実施したホッキ貝稚貝の発生状況調査結果(速報)により、全県的に大量発生していることが分かった。その一要因として、ホッキ産卵期である6~7月の水温が低めで経過したことが挙げられる。
常磐南部 ~ 鹿島灘 (茨城県沿岸; 茨城水試発表)	9月~11月: 親潮系冷水の影響が残り、表面水温は「低め」~「やや低め」で、下層水温は沖合北部で「非常に低め」、その他の沿岸部で「低め」、鹿島灘で「やや低め」~「やや高め」となった。9月から11月にかけて同様の傾向を示したが、夏以来の冷水の影響は弱くなった。	12月: 親潮系冷水の南下が、沖合に偏り、鹿島灘には弱い暖水舌が形成されている。このため、北部では沖合を中心に「低め」~「平年並」になり、鹿島灘沿岸は「平年並」~「やや高め」、鹿島灘沖の黒潮域では「平年並」となっている。	親潮系冷水の南下は沖合に偏り、鹿島灘南部には弱い暖水舌が度々形成される。このため、北部では沖合を中心に「低め」~「平年並」になり、鹿島灘沿岸は「平年並」~「やや高め」、鹿島灘沖の黒潮域では「平年並」となる。	親潮系冷水の勢力は、平年並からやや強くと考えられるが、対馬暖流と岩手沖の暖水塊の影響で、その流路は沖合に偏り、沿岸部への冷水の波及は起こりにくい。 黒潮の流路は、当面N型基調が続くため、常磐鹿島海域への大規模な暖水の波及は起こりにくい。親潮系冷水が沖合に偏っているため、沿岸部への小規模な暖水舌が形成される。	・秋シラスが不漁であった エチゼンクラゲの南下が認められた(11月) カタクチイワシの来遊が遅れている

各階級の水温年平均偏差の範囲

階級区分(出現率)	三陸北部	三陸中部		三陸南部	常磐北部	常磐南部～鹿島灘
		距岸10海里内	距岸10～70海里			
極めて高い(2.5%)	+2.4 ~	+4.0 ~	+6.0 ~	+2.4 ~	+4.0 ~	+4.0 ~
高い(7.5%)	+1.6～+2.3	+2.5～+3.9	4.0～+5.9	+1.6～+2.3	+2.5～+3.9	+2.5～+3.9
やや高い(20%)	+0.7～+1.5	+1.0～+2.4	1.5～+3.9	+0.7～+1.5	+1.0～+2.4	+1.0～+2.4
平年並み(40%)	+0.6～-0.6	+0.9～-0.9	1.4～-1.4	+0.6～-0.6	+0.9～-0.9	+0.9～-0.9
やや低い(20%)	-0.7～-1.5	-1.0～-2.4	1.5～-3.9	-0.7～-1.5	-1.0～-2.4	-1.0～-2.4
低い(7.5%)	-1.6～-2.3	-2.5～-3.9	4.0～-5.9	-1.6～-2.3	-2.5～-3.9	-2.5～-3.9
極めて低い(2.5%)	-2.4 ~	-4.0 ~	-6.0 ~	-2.4 ~	-4.0 ~	-4.0 ~